

## 研究余滴

## 『言海』『日本大辞書』の収録語数をめぐって

湯 浅 茂 雄

辞書史研究において、研究対象とする辞書にどのくらい見出し語があるのか、その収録語数を調べることは必須の調査項目である。規模の小さな辞書では、その見出し語数を数えることは難しくないが、万単位の見出し語を収める辞書になると、その正確な収録語数を数えることは容易ではない。辞書の編者自身によって収録語数が明示されることはまずない。特に歴史的な資料にあってはそうである。現代の辞書においては、たとえば『三省堂国語辞典』第7版（2014年1月10日）の序文の収録語数に言及する部分は以下のように記されている。

第七版の収録項目数は、約八二〇〇〇（見出し項目は約七六六〇〇、「派生」その他各種の関連項目が五四〇〇）です。

このように、「約～」として概数を示すのが常であり、何万何千何百何十何のように一の位の数字まで示すことはない、一般の辞書利用者にとっては、収録された見出し語数については、その概数が示されていれば十分であろうから、当然のこととも言える。しかし、辞書を研究対象とする場合には、後に述べるように正確な収録語数を知る必要が生じるのである。

そのような状況の中で、大槻文彦の『言海』（明治22年5月～明治24年4月）は、編者によって、詳細な見出し語数が示されている点に特色がある。それは巻末にある「言海採収語……類別表」（以下は、筆者架蔵の大型版1冊本〈明治31年2月第41版〉より転載）である。

年次	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042	2043	2044	2045	2046	2047	2048	2049	2050	2051	2052	2053	2054	2055	2056	2057	2058	2059	2060	2061	2062	2063	2064	2065	2066	2067	2068	2069	2070	2071	2072	2073	2074	2075	2076	2077	2078	2079	2080	2081	2082	2083	2084	2085	2086	2087	2088	2089	2090	2091	2092	2093	2094	2095	2096	2097	2098	2099	2100	2101	2102	2103	2104	2105	2106	2107	2108	2109	2110	2111	2112	2113	2114	2115	2116	2117	2118	2119	2120	2121	2122	2123	2124	2125	2126	2127	2128	2129	2130	2131	2132	2133	2134	2135	2136	2137	2138	2139	2140	2141	2142	2143	2144	2145	2146	2147	2148	2149	2150	2151	2152	2153	2154	2155	2156	2157	2158	2159	2160	2161	2162	2163	2164	2165	2166	2167	2168	2169	2170	2171	2172	2173	2174	2175	2176	2177	2178	2179	2180	2181	2182	2183	2184	2185	2186	2187	2188	2189	2190	2191	2192	2193	2194	2195	2196	2197	2198	2199	2200	2201	2202	2203	2204	2205	2206	2207	2208	2209	2210	2211	2212	2213	2214	2215	2216	2217	2218	2219	2220	2221	2222	2223	2224	2225	2226	2227	2228	2229	2230	2231	2232	2233	2234	2235	2236	2237	2238	2239	2240	2241	2242	2243	2244	2245	2246	2247	2248	2249	2250	2251	2252	2253	2254	2255	2256	2257	2258	2259	2260	2261	2262	2263	2264	2265	2266	2267	2268	2269	2270	2271	2272	2273	2274	2275	2276	2277	2278	2279	2280	2281	2282	2283	2284	2285	2286	2287	2288	2289	2290	2291	2292	2293	2294	2295	2296	2297	2298	2299	2300	2301	2302	2303	2304	2305	2306	2307	2308	2309	2310	2311	2312	2313	2314	2315	2316	2317	2318	2319	2320	2321	2322	2323	2324	2325	2326	2327	2328	2329	2330	2331	2332	2333	2334	2335	2336	2337	2338	2339	2340	2341	2342	2343	2344	2345	2346	2347	2348	2349	2350	2351	2352	2353	2354	2355	2356	2357	2358	2359	2360	2361	2362	2363	2364	2365	2366	2367	2368	2369	2370	2371	2372	2373	2374	2375	2376	2377	2378	2379	2380	2381	2382	2383	2384	2385	2386	2387	2388	2389	2390	2391	2392	2393	2394	2395	2396	2397	2398	2399	2400	2401	2402	2403	2404	2405	2406	2407	2408	2409	2410	2411	2412	2413	2414	2415	2416	2417	2418	2419	2420	2421	2422	2423	2424	2425	2426	2427	2428	2429	2430	2431	2432	2433	2434	2435	2436	2437	2438	2439	2440	2441	2442	2443	2444	2445	2446	2447	2448	2449	2450	2451	2452	2453	2454	2455	2456	2457	2458	2459	2460	2461	2462	2463	2464	2465	2466	2467	2468	2469	2470	2471	2472	2473	2474	2475	2476	2477	2478	2479	2480	2481	2482	2483	2484	2485	2486	2487	2488	2489	2490	2491	2492	2493	2494	2495	2496	2497	2498	2499	2500	2501	2502	2503	2504	2505	2506	2507	2508	2509	2510	2511	2512	2513	2514	2515	2516	2517	2518	2519	2520	2521	2522	2523	2524	2525	2526	2527	2528	2529	2530	2531	2532	2533	2534	2535	2536	2537	2538	2539	2540	2541	2542	2543	2544	2545	2546	2547	2548	2549	2550	2551	2552	2553	2554	2555	2556	2557	2558	2559	2560	2561	2562	2563	2564	2565	2566	2567	2568	2569	2570	2571	2572	2573	2574	2575	2576	2577	2578	2579	2580	2581	2582	2583	2584	2585	2586	2587	2588	2589	2590	2591	2592	2593	2594	2595	2596	2597	2598	2599	2600	2601	2602	2603	2604	2605	2606	2607	2608	2609	2610	2611	2612	2613	2614	2615	2616	2617	2618	2619	2620	2621	2622	2623	2624	2625	2626	2627	2628	2629	2630	2631	2632	2633	2634	2635	2636	2637	2638	2639	2640	2641	2642	2643	2644	2645	2646	2647	2648	2649	2650	2651	2652	2653	2654	2655	2656	2657	2658	2659	2660	2661	2662	2663	2664	2665	2666	2667	2668	2669	2670	2671	2672	2673	2674	2675	2676	2677	2678	2679	2680	2681	2682	2683	2684	2685	2686	2687	2688	2689	2690	2691	2692	2693	2694	2695	2696	2697	2698	2699	2700	2701	2702	2703	2704	2705	2706	2707	2708	2709	2710	2711	2712	2713	2714	2715	2716	2717	2718	2719	2720	2721	2722	2723	2724	2725	2726	2727	2728	2729	2730	2731	2732	2733	2734	2735	2736	2737	2738	2739	2740	2741	2742	2743	2744	2745	2746	2747	2748	2749	2750	2751	2752	2753	2754	2755	2756	2757	2758	2759	2760	2761	2762	2763	2764	2765	2766	2767	2768	2769	2770	2771	2772	2773	2774	2775	2776	2777	2778	2779	2780	2781	2782	2783	2784	2785	2786	2787	2788	2789	2790	2791	2792	2793	2794	2795	2796	2797	2798	2799	2800	2801	2802	2803	2804	2805	2806	2807	2808	2809	2810	2811	2812	2813	2814	2815	2816	2817	2818	2819	2820	2821	2822	2823	2824	2825	2826	2827	2828	2829	2830	2831	2832	2833	2834	2835	2836	2837	2838	2839	2840	2841	2842	2843	2844	2845	2846	2847	2848	2849	2850	2851	2852	2853	2854	2855	2856	2857	2858	2859	2860	2861	2862	2863	2864	2865	2866	2867	2868	2869	2870	2871	2872	2873	2874	2875	2876	2877	2878	2879	2880	2881	2882	2883	2884	2885	2886	2887	2888	2889	2890	2891	2892	2893	2894	2895	2896	2897	2898	2899	2900	2901	2902	2903	2904	2905	2906	2907	2908	2909	2910	2911	2912	2913	2914	2915	2916	2917	2918	2919	2920	2921	2922	2923	2924	2925	2926	2927	2928	2929	2930	2931	2932	2933	2934	2935	2936	2937	2938	2939	2940	2941	2942	2943	2944	2945	2946	2947	2948	2949	2950	2951	2952	2953	2954	2955	2956	2957	2958	2959	2960	2961	2962	2963	2964	2965	2966	2967	2968	2969	2970	2971	2972	2973	2974	2975	2976	2977	2978	2979	2980	2981	2982	2983	2984	2985	2986	2987	2988	2989	2990	2991	2992	2993	2994	2995	2996	2997	2998	2999	3000
人口	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									

[illegible]

見出し語の語頭音節別に、さらに語種（和語・漢語・外来語・混種語）別の内訳の見出し語数を示す詳細なものである。見出し語の各語頭音節別の分布や、ア行、カ行、サ行などの分布、語種別の分布、さらに、たとえばオランダ語起源の外来語が、全体で、あるいは各語頭音節別に、どれぐらい収められているかなどを知ることが出来るわけである。そして、この類別表の総計欄によれば『言海』の総見出し語数は 39103 語とされている。

39103 語は編者大槻文彦自身のカウントによるものであり、信頼したいところである。したがって、その数値をそのまま用いる論考も少なくない。しかしながら、ある語頭音節をサンプルとして実際に数えてみれば（たとえば「類別表」では「る」項は 34 とあるが、実際には 45 語が数えられる）、我々が現在手にすることのできる刊本の『言海』の見出し語数と、「類別表」の見出し語数とは一致していないことがわかるのである。『言海』の総見出し語数に触れる論考等に以下のものがある。

岡島昭浩(2003)は、『言海』の見出し語数を明らかにすることを目的としたものではなく、語の音配列の資料としてみるために類別表の再編を試みたものであるが、結果的に総計が示されており、それによる39364という数字が示されていて、「類別表」より261語多くなっている。

また、豊島正之編（2016～）「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」の「言海データベース」で見出し語の総数を調べると 39443 語という結果となり、「類別表」より 340 語多くなっている。

他にも、犬飼守薫（1999）や田鍋桂子（2000）にも『言海』の見出し語数に触れる言及がある。

ここで、上の豊島正之（2016～）を利用させていただき、豊島データベースから読み取れる各語頭音節別見出し語数を、「言海採収語…類別表」および、後に取り上げる山田美妙『日本大辞書』についても語頭音節別の見出し語数を対照した「別表 『言海』と『日本大辞書』の見出し語数」を作成した。

別表によれば、「類別表」と豊島データベースが一致するのは「も」のみで、他は 1 語の差を含めて、すべて増減がある。中でも「こ」は類別表が 1248 に対して豊島データベースは 1741 で、457 語の差がある。この他 100 語近い差があるものに「し」「そ」がある。豊島データベースでは、それぞれ 87 語、104 語少なくなっている。

このような差異が生じているのは、湯浅茂雄（1997）で一部を明らかにしたように、大槻文彦が最終稿の入校直前まで、入念に編集作業を行っていたためであると考えられる。「言海採収語…類別表」は、一定の成稿を得たある段階でまとめられてのものであり、最終段階での見出し語数を反映していないと考えられる。したがって「こ」「し」「そ」の項は、類別表の作成以降に、かなり大きな手直しが加えられたと考えられるのである。

以上のように、ある辞書の見出し語数の詳細を調べることは、その辞書の成立過程を考える材料になる可能性があるのである。

別表の『日本大辞書』欄は『日本大辞書』について、語頭音節別の見出し語数、各行の総数、総見出し語数を調査した結果である。調査のテキストは名著普及会の覆刻版（昭和 54 年 3 月）によった。調査には当時学部 2 年生であった堀合裕香さんにお手伝いをいただき、両者の調査を突き合せ、食い違った場合には、その原因を検証し、最終的に一致をみた数字で作成したものである。現段階では、『日本大辞書』の語頭音節別の見出し語数と総数を明らかにしたものとして精度の高いものと考えており、活用していただければ幸いである。

山田美妙（刊期の記名は「山田武太郎」）の『日本大辞書』（明治 25 年 7 月～明治 26 年 12 月 12 冊 第十巻補と付録が合本になった 11 冊本もあるが、12 冊本の内容を示す）の刊行時期、各冊の語彙区間は以下のとおりである。（アラビア数字は刊本の頁数）

別表 『言海』と『日本大辞書』の見出し語数

項目	『言海』		『日本大辞書』	
	豊島データベース	言海採収語…類別表	湯浅の調査	
あ	1699	1696	3099	
い	1806	1800	3033	
う	1230	1244	1870	10425
え	310	318	528	
お	1077	1119	1895	
か	2587	2576	4653	
き	1263	1256	2582	
く	1402	1404	1886	12864
け	876	869	1306	
こ	1741	1248	2437	
さ	1788	1784	2290	
し	3325	3412	4627	
す	769	768	1084	10096
せ	1000	1004	1342	
そ	628	732	753	
た	1696	1695	2006	
ち	992	997	1158	
つ	825	822	952	6253
て	759	768	934	
と	1113	1088	1203	
な	732	731	825	
に	487	480	544	
ぬ	184	183	207	2310
ね	331	330	394	
の	271	270	340	
は	1728	1713	1893	
ひ	1128	1127	1235	
ふ	999	995	1053	5144
へ	342	339	349	
ほ	546	543	614	
ま	804	803	847	
み	727	723	741	
む	341	340	366	2731
め	336	334	344	
も	412	412	433	
や	504	503	525	
い	1			
ゆ	275	298	284	1243
え	1			
よ	426	423	434	
ら	268	266	256	
り	328	324	315	
る	45	34	53	942
れ	190	189	179	
ろ	116	115	139	
わ	398	396	418	
ゐ	166	165	158	
う	1			1131
ゑ	147	146	146	
を	323	321	409	
総見出語数	39443	39103	53139	

## 『日本大辞書』12分冊の刊行時期と語彙区間

第一巻 (あ 1 ～ あんをん 98)	明治二十五年	七月	六日
第二巻 (い 99 ～ うちぎ 228)	明治二十五年	八月二十一日	
第三巻 (うちぎ 229 ～ おんのじ 358)	明治二十五年	九月二十四日	
第四巻 (おんば 359 ～ かるづ 488)	明治二十五年	十月二十七日	
第五巻 (かるゝ 489 ～ くらゐ 616)	明治二十五年	十二月二十三日	
第六巻 (くらゐ 617 ～ こづきえび 720)	明治二十六年	二月二十一日	
第七巻 (こづく 721 ～ さんみや・うさわがせ 808)			
	明治二十六年	四月	一日
第八巻 (さんみやく 809 ～ すずム 928)	明治二十六年	五月	七日
第九巻 (すずム 929 ～ つかム 1064)	明治二十六年	六月	九日
第十巻 (つつがもない 1065 ～ ふねう 1264)	明治二十六年	八月	八日
第十巻補 (ふねのなめ 1265 ～ をんをん 1399)			
	明治二十六年十二月	八月	
附録	明治二十六年十二月	十九日	

『日本大辞書』は『言海』に対する批判的立場から編纂されたが、『言海』の見出し語とその記述を参考にして編纂されたことは疑う余地はない。『言海』にあり、『日本大辞書』ない項目もあるが、少数であり、この点、『言海』と『日本大辞書』の総見出し語数の差分が、ほぼ『日本大辞書』が『言海』に対して増補した見出し語語彙にあたる。『日本大辞書』がどのような見出し語を増補したかを検討することによって、『日本大辞書』の資料性が明らかになると考えるのである。その観点から、『日本大辞書』の見出し語数の調査が必要になったのである。

別表によれば、『日本大辞書』の総見出し語数は53139語である。ただし平弥悠紀(2014)では53137語としている。『言海』の総見出し語数は「言海採収語…類別表」の39103語によらず、豊島氏の言海データベースにより39433語とすれば、単純な総見出し語数では、『日本大辞書』は『言海』より13696語、総見出し語数が多いという結果になった。

行ごとの増減では、た行(+868語)以降急激に増補量が減少し、な行(+305語)、は行(+401語)、ま行(+110語)、や行(+36語)、ら行(-5語)、わ行(+96語)である。

このことは、前田富祺(1977)が「特に後半の部分の記述は粗雑である」とし、また犬飼守薫(2014)も「ことに、後半の部分の記述は粗雑かつ杜撰であり」とすることと関係していよう。

『日本大辞書』の辞書史上の評価では、全ての見出し語に東京アクセントを表示したことは、当時の東京語のアクセントを知るために役立つものとして高い評価があるが、それを除いて、評価は必ずしも高くない。

しかしながら、すでに今野真二(2014)が指摘するように、『日本大辞書』も明治期の日本語の考える際に、価値ある情報を読み取ることができる辞書であると考ええる。

そのように考えると、『言海』に対して増補された13696語の内容の検討が必要になるのだが、ここで筆者の視点から、増補された見出し語の傾向を整理して示すと以下ようになる。

- ①活用語の場合、その文語形に対して口語形を増補する。(近体動詞、近体形容詞、近体等の用語を用いる。『言海』の「あいらし」に対して「あいらしイ」を新たに立項し、『言海』に対する新項目においても、「あいくるし」を立項するとともに「あいくるしイ」を立項するなど。)
- ②原形に対する音訛形を増補する。(多く参照見出しの扱いで「あかつけ(あかけノ訛)」「あかつつら(あかつらノ訛)」「あかつばぢ(あかはぢノ訛)」など)
- ③派生関係にある語を増補する。('あいくるし」「あいくるしイ」に対して「あいくるしさ」を立項する。)
- ④上に関連するが、「～方」「～変わり」「～気味」「～切り」等の接辞的要素が付く言語単位に関して、『日本大辞書』は積極的に立項する方針をとる。('明き方」「あくかた〈厭き方)」「あきがた〈厭方)」「商変わり」「明き気味」「厭き気味」「明き切り」など)
- ⑤複合語を増補する。('言海』の「あいまい(曖昧)」に対して「▲あいまいや」を立項するなど。③④⑤から「曖昧」に関連して、「あいまい」「●あいまいさ」「あいまいに」「▲あいまいや」が立項される。)
- ⑥『言海』が一項目の意味区分で扱うものを、項目を新たに立項する。('あげ<上)と「あげ<揚げ)」など)
- ⑦古語の増補に関して、特に枕詞の増補。('言海』は全体で100語ほどの枕詞を収めるが、『日本大辞書』ではアの部のみで52語が収められている。〈ア部の語彙区間だけで『言海』に対して41語の増補)52語の内、1語の△〈古語・廃語)を除いて、すべて○〈文専用)である。
- ⑧本草語の増補。『言海』を参照しつつ、改めて直接『言海』の参照資料(『本草綱目啓蒙』等)を参照して、別名を積極的に立項する姿勢が見える。

あま・も(全平) 名。{甘藻} 菖蒲ニ似タ葉ニ海草ノ名。生ナノハ幹ヲコヤシニツカヒ、乾シテ草履ヲ編ム。=モシホグサ。=スゲモ。=ハマユフ。

＝モハ。＝リユウトユヒノキリハズシ。

(下線部は『言海』には別名として掲出されていないが、『日本大辞書』は『本草綱目啓蒙』を参照して補ったと考えられる。これに基づきこれら別名もすべて立項されている。)

- ⑨●(言専用)を中心とするオノマトペの増補。(平弥悠紀(2014)によれば、両辞書に収録されたオノマトペは、『言海』全体で325語、『日本大辞書』全体で1223語であり、『日本大辞書』は『言海』の四倍近いオノマトペを収めている。同論文によれば、『日本大辞書』に収められたオノマトペの文体注等の内訳は○(文専用)が31語、●(言専用)が915語、無印(文言両用)169語、△(古語・廃語)61語、▲(方言・俗語)48語である。)

- ⑩▲(方言・俚語)及び上記オノマトペ以外●(言専用)の増補

- ⑪漢語・外来語の収録状況は両辞書に大きな差はない。(試みに『言海』巻末「ことばのうみのおくがき」の刊本一頁分には、異なりで120語の漢語が用いられているが、『言海』で逆引きすると、120語中78語(65%)、稿本にあったものを含めると120語84語(70%)の収録率であり、『日本大辞書』では同様に120語中81語(67.5%)の収録率となり、両辞書の収録率にはほとんど差がない。外来語についても、試みにラ行を例にとって両辞書の見出し語を比較しても、ほとんど差がみとめられない。

このうち①②や⑨⑩に関わるが、山田美妙が辞書中に見出し語の文体を区分する記号である●(言専用)や▲(方言・俚語)を付される話し言葉・俗語・方言や、③④⑤などの派生形や複合語を積極的に立項したことは、明治時代語の言語資料としての活用が望まれるのである。

以上のように、見出し語の1語1語の検討につながる場合においては、見出し語の数を数えていく作業は、辞書史研究においては少なからぬ意味を持つのである。

**附記** 本稿は第118回国語語彙史研究会において、「語彙研究資料としての山田武太郎『日本大辞書』—「●言専用」「▲方言、俚語」の見出し語彙を中心に—と題する発表の一部に基づいたものである。

## 参考文献

- 犬飼守薫(1999)『近代国語辞書編纂史の基礎的研究』風間書店  
 犬飼守薫(2014)『日本語大辞典 下』(朝倉書店)「日本大辞書」の項  
 岡島昭浩(2003)「言海採取語…類別表」再読(『国語語彙史の研究』22 和泉書院)

- 今野真二 (2014) 『ことばの海と明治の日本語 「言海」を読む』 角川選書 524
- 田鍋桂子 (2000) 「『日本辞書／言海』の語種—外来語を中心に—」『日本語論叢』 1
- 平弥悠紀 (2013) 「『言海』の音象徴語」『同志社大学日本語・日本文化研究』 11 号
- 平弥悠紀 (2014) 「『日本大辞書』の音象徴語」『同志社大学日本語・日本文化研究』  
12 号
- 前田富祺 (1977) 『国語学研究事典』 (明治書院) 「日本大辞書」の項
- 湯浅茂雄 (1997) 「『言海』と近世辞書」 (『国語学』 188)

(ゆあさ しげお・実践女子大学教授)